

「第17回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」

広島市立大学大学院院生 アウンチーミン

私はミャンマーからの留学生で、現在、広島市立大学の平和学研究科修士課程に在籍しています。専攻は日本の紛争と平和、またミャンマーと日本の関係や日中関係についても学んでいます。在広島ミャンマーコミュニティの代表として母国ミャンマーの内戦とクーデターに反対し抵抗する活動をして、平和と民主化を取り戻すために広島で頑張っています。大学一年生の時、先生と共に安野発電所を訪れてフィールドワークを行い、そこでの歴史について学んだことが、私の平和学への興味を深めるきっかけとなりました。そして今回、「第17回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」に参加し、日本と中国の歴史的な和解を実感する貴重な機会を得ました。

「第17回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」への参加は、私にとって深く考えさせられる体験となりました。日本に住むミャンマー人として、この集いに参加したことで、日本人と中国人が過去の悲劇を共に記憶し、未来の平和を祈る姿に深く感銘を受けました。歴史的な悲劇を乗り越えて築かれた和解は、平和と友好の象徴であり、その重要性を次世代に伝えていくことが求められていると感じます。私も平和を学ぶ学生として、この和解の歴史を次世代に伝える手助けができればと強く願っています。このような平和の祈りを通じて、広島に住む中国人ともつながりを持ち、さらなる学びと理解を深めていきたいと思えます。

「地域の視点から」と題された記事(2023年8月15日の中国新聞社説)には、安野発電所建設に関連して強制連行された中国人の記憶を、どのように語り継ぐべきかについて述べられていました。この地元根付いた記憶を次の世代に伝えることの意義は計り知れません。戦争がもたらした悲劇は、当事者だけでなく、その地域全体に刻まれるものです。私も、平和学を学ぶ者として、このような地域の視点を理解し、各地に存在する戦争の記憶に触れることで、歴史を継承する責任を感じています。

私自身、集いに参加する前は、日本と中国の間には政

治的な緊張があり、両国は仲が悪いという印象を持っていました。しかし、この集いに参加してみると、歴史的な出来事やその悲劇に対する反省の気持ちから、国と国の政治的な緊張とは異なり、両国の市民レベルでは個々の市民が歴史の痛みを共有し、互いを尊重し合い、和解と友好を築く姿に感動しました。平和と友情を築こうとしていることを学ぶことができました。日本の方々が中国人受難者を追悼し、平和を祈る姿勢に深い感銘を受け、国境を超えた人間同士の絆や理解の大切さを改めて実感したこのような姿勢は、私たち一人ひとりが世界平和に貢献するために大切なことだと感じました。

また、安野発電所の歴史に触れることで、日本と中国の歴史や国籍を超えた友情を感じることができました。安野発電所の建設に関連して強制連行された中国人が経験した苦難は、私にとっても重い事実として受け止められました。しかし、その苦しい歴史を乗り越え、今ではこのように和解と平和を祈る場が設けられていることは非常に意義深いと感じました。今回の体験は、歴史を学ぶだけでなく、平和への祈りや共感を通じて、未来へとつながる橋を築く大切さを学ぶ機会となりました。

私の祖国ミャンマーも、長年にわたって多くのさまざまな紛争や困難を経験してきました。そのため、日本と中国のように歴史的な対立を乗り越え、共に未来を築いていくための和解の取り組みは、私にとっても大変参考になるものでした。将来、私自身もミャンマーと他国との平和的な関係を築くために貢献したいと強く思いました。

今回の集いで感じたこと、学んだことを胸に、私は広島での留学生生活をより一層大切に、平和を学び続けていきたいと思えます。今回の集いをきっかけに、広島に住む中国人とも交流し、平和のあり方について学びを深めたいと考えています。このような活動を通じて、ミャンマーの人々にも、日本と中国が和解と友好を築くために努力してきた歴史を伝えることで、平和への意識を広めていきたいと考えています。